



第8図 昭和47年12月18日前線移動図

すなわち強風を持った暖気にふたをされたせまい弱風域の持続という状態で高濃度が発生している。なおこの調査にあたっては東京都、神奈川県、千葉県から資料の提

供を受け、また予報課の皆様には検討に加わって頂いた。厚く感謝の意を表します。

文献

- 1) 杉浦 茂 (1963): 昭和38年5月24~28日前線通過に伴う東京の天気。関東甲信地方予報検討会資料。
- 2) 河村 武 (1966): 中部日本における冬の地上風系。地理学評論第39巻第8号。
- 3) Kirk T.H., (1966): Some aspects of the theory of fronts and frontal analysis. Quart. J. Roy Meteor. Soc., **92**, 374-381.
- 4) Creswick, W.S., (1967): Experiments in objective frontal countour analysis. J. Meteor. Soc., **6**, 774-781.
- 5) Orlandi I., (1968): Instability of frontal waves, J. Atmos. Sci., **25**, 178-200.



高橋浩一郎著
生存の限界

—日本の未来を予測する—

毎日新聞社, 1973, 262 pp, ¥ 750

著者はこの本の序文で、これを書くつもりになった動機は、「ローマ・クラブのレポートを読んだことから始まる」と述べている。ところが、本書の内容を見ると、文明の危機、爆発する人口、枯渇する資源、エネルギー革命、限りある水資源、自給出来ない生物資源、増大する公害、自然の生態、気象環境と社会現象、変わる気候、迫る大地震の脅威、自然災害の克服、情報の心理効果、国土の計画的利用、望まれる未来設計、からなり、ローマ・クラブの報告書より一層広い範囲にわたって問題をとりあげている。このことは著者が単に優れた気象学者であるばかりでなく、平素から自然科学、人文科学を包括する広い視野と見識とをもっている証左である。最近トイレット・ペーパー等がまき起した騒ぎがあった

が、本書のなかにはそれを予測するかの如くに、「デマの流布量=影響の重要性×現象の曖昧性」という公式がのせられているが、これなどは著者の博識の一端をうかがわせるものであろう。

本書は人類の危機を予告し、考えさせられる問題を数多く提出しているばかりでなく、それらをわかり易く、かつ興味深く解説している点からも、是非これを読み、さらに考えることをおすすめしたい。

この本の母体になっているローマ・クラブの報告書は、その後数多くの論議をよんでいるが、やがて危機が来るという点では大方の意見は一致しており、問題は危機到来の時期とその回避方法についてであるようである。勿論両者は関連しており、時期が早いか遅いかによって、おのづから対応策も異ってくる筈である。そこでわれわれ気象を学んでいる者の立場からすると、気候変動の予測をより正確にすることが、この問題に一番貢献しうるみちであらう。多分このような見地から、GARPではFGGE (First GARP Global Experiment) に続く問題として、気候変動の研究を採り上げようとしているが、わが国の研究者の間にもこの気運が滲透することが望まれる。

(山本義一)